

茨城県本部

次世代といっしょに 産直運動を

楽しく学び体験

次世代会員とともに
産直運動にとりくみ、
仲間づくりを広げている
茨城県本部のとくく
みを紹介します。

学習を力に 仲間づくり

茨城では、米・野菜・大豆畑トラストの産直運動にとりくんでい
ます。産直運動部では
産直利用会員を増やそ
うと、産直友の会と協
力して毎年3月の部会
で支部ごとの目標を提
案しています。

野菜は、高齢で所定
の場所に取りに行けな
いなどで利用する会員
が減り、米や大豆畑ト
ラストは会員比約2割
の利用率です。目標の
3割に近づけるには



田植え交流会。クイズやミニ学習でワイワイ

「学習が大事」と確認。
して決めていることに
びつくりとの感想も。
「去年の「令和の米パ
ンク」では「なぜ米が
新たに産直ポストがで
きたのか」

協議を大事に、 楽しい企画で

農民連との定期協議
会を年2回以上持ち、
各支部の担当者や生産
者が参加します。初め
に「4つの共同目標」
を読み合わせ、常に確
認事項を意識するよう
にしています。ミニ学
習やお互いの率直に意
見を出し合える大切な
交流の場です。2020
年には「ネオニコチノ



みぞ蔵見学。大きな
みぞ蔵にびっくり

の協議会で相談し、
楽しい企画の計画を
立てています。毎回
次世代会員が親子で
体験できるよう大豆
の種植え、枝豆収穫、
豆腐作り、田植え交
流会やさつま芋掘
り、みぞ蔵見学など
で産直運動を知る機
会になっています。

農民連との共同企画
で、埼玉県熊谷市に
ある大豆畑トラストの
醤油工場を見学し、
動画を作成して学習
会で披露するなど産
直運動をアピールし
ています。今年には
醤油工場がなくなり
、8月に千葉県
富津市の醤油蔵見学
を予定しています。

カフェで学習も 食糧法改悪って？

かすみがうら支部は
「農業カフェ」を7月
5日に開きました。会
員でもある農民連事務
局長を講師に、次世
代会員6人を含め16
人が参加し、食糧法
改悪を学習。「そも
そも食糧法って？」
「今年のお米は大
丈夫？」などのおし
ゃべりから、「おい
しい作物を作る恵
まれた国なのに、輸
入に頼るなんてもた
ない。職業として農
業の価値を上げ後継
者育成にも力を入れ
てほしい」

「子どもたちが食糧
難にならないよう、
農業を守る政策が必
要」「日本農業の危
機状況が分かった。家
庭菜園も続け、産直
大豆も利用して支え
たい」などの感想も
出され、産直運動を
伝える学習会になり
ました。



▲希望の牧場の牛たち。全国の支援を受けながら、「原発事故の生き証人」として命の大切さを訴える

◀「おれたちの伝承館」HPはこちら

あの日から15年 ⑦

東京電力福島第一原発事故

東京電力福島第一原発
事故で浪江から東京に避難
している、門馬昌子さんの連
載が6回を終えた。今回は、
4月に浪江の自宅へ一時帰
宅した門馬さんに記者が同
行した一日を紹介したい。

上野発の特急に乗り、3
時間で浪江に到着。かつて
住宅や店舗があったと思わ
れる駅周辺は更地となり、
柵で囲まれている。駅まで
門馬さんが車で迎えにきて
くれた。門馬さんの自宅は
2階建ての大きな一軒
家だ。19軒あった隣近
所で住民が戻っている
のは3軒という。「絶
対に（解体で）家を壊
すもんかと思ってるね。
たたかいの象徴」と門
馬さん。玄関を入ると
電気ブレーカーを次
つぎと上げながら、「一
つだけは電源を入れて
おくの。水道が凍って
しまうから」。月一回、
自宅を訪れた夜は駅前
のビジネスホテルに泊まる
という。屋内の線量が下
がっていないためだ。

〈最終回〉

浪江への一時帰宅に同行

立請戸小学校「東日本大
震災・原子力災害伝承館」
「希望の牧場・よしざわ」
「おれたちの伝承館（おれ
伝）」を回った。請戸小学
校と災害伝承館では、震災
・原発事故の記録と記憶の
継承の展示に見入った。

一方、「希望の牧場」で
見た光景は何と言えよ
いか。牧場主・吉澤正巳さ
んは旧警戒区域内に取り残
されたひびく牛の殺処分を
拒み、保護・飼育を続けて
いる。牧場で草を食む牛
たちの姿に、取り返し
つかない事故を招いた人
間の愚かさを感じる。隣
町の小高にある「おれ伝」
も印象深かった。フォト
グラフアー・中筋純さんが
館長の美術館で、3・11に
関連する写真や絵、彫刻、
詩などが並ぶ。飢えた牛が
かじった柱を再現したイ
ンスタレーションなど、
言葉にならない思いを
表現した作品ばかり。

帰還エリアが広がって
も浪江は約80%が「帰還
困難区域」で、沿岸部には
ハイテク産業などが誘致
され、浪江駅周辺は大規
模な整備計画がすすむ。
福島を訪れると、被災の
実態はもうろく、知って
いるようで知らなかった
人々の思いに直にふれる。
暮らした人々は、国・東
電からの理不尽な扱いを
受け続け、それは暴力に
等しい。原発事故を風化
させず、向き合うこと。
それが私たち一人ひと
りにつづけられている。
（担当：石原和）